県外派遣報告書

審判員名	箱石　拓也	所属　　埼玉県
大 会 名	令和5年度　インターハイ	
期　　間	令和5年　7月24（月）～7月26（水）	
会　　場	北海きたえーる	

スケジュール

期　　日	内　　容	場　　所
7月24日（月）	審判会議・研修会	北海きたえーる
7月25日（火）	1回戦	北海きたえーる
7月26日（水）	2回戦	北海きたえーる

会議　講義　内容

研修会テーマ 「コール　ザ　オヴィアス～3POメカニクスの実践から」（処置ミスゼロに向けて　2019鹿児島IHから継続的な取り組み）
Ⅰテーマ設定の背景、大会運営にあたって　～審判員行動規範、PGC、チームとの共有事項～
担当　塩谷様・岩井様
・テーマ設定について
コールザオビアス　～3POメカニクスの実践から～
処置ミスゼロを目指して
EOQ間際のファールコールとTFの処置ミス
過去の試合中におけるトラブルから
①得点加算ミスで勝負が決まる　②得点ミス及び個人ファール加算ミス　③EOQ１．６秒、時計動かず
※クルーの誰が、どんな情報を把握するのか？クルーとして決断できたのか？
・テーマ設定についての意図・背景
全国どこへ行っても、同様なメカ、プレゼンへの理解が進む中、「正しい判定」が進められているか？
より目の肥えた選手・観客が見るため、明らかなものをコツコツと判定すること。誰にでも分かりやすい判定を！
・映像
①イリーガルシリンダー　②イリーガルスクリーン　③シリンダー
・行動規範
責任と自覚を　多くの関係者がいることを知っておく
・PGC
①ミッション・テーマ・目的設定から　②ビジョン：どんなゲームにするのか（方向性）　③バリュー：ガイドライン、メカニクス、IOT
※目線を合わす作業、様々な内容の共通理解の場

Ⅱ「コール　ザ　オヴィアス」　～ベーシックなプレイコーリング&コール　ザ　インパクト～　（高校生の特徴を捉えて）
担当　小田中様・古畑様
・北海道インターハイの成功！ゲームの始めから終わりまでベーシックを積み上げろ！
ハイクオリティーゲームを目指すために必要なこと
・コールザオビアス　・メカニクス　・IOT　・ルール　・プレイコーリング
この5つを連動させることができるかどうかで決まる
Q　明らか！とは何でしょう？
①コールザベーシック（基本的な判定、プレコーリング）
②コールザインパクト（誰が見ても、客観的に見えるもの、誰かが必ず鳴らすもの）
最大のゲームコントロール
・コールザオビアス　・メカニクス　・IOT　・ルール　・プレイコーリング
最大のGC
「セル・ザ・ディシジョン」＝判定を売り込む
※きちんとした判定を出し続ける。

Ⅲ「コール　ザ　オヴィアス」　～3POメカニクスからの分析・CW/GC～
担当　平出様・久米様
※映像研修のため項目のみ
ポジションアジャスト　プライマリー　セカンダリー（ケイデンスホイッスル）　チェックイン、チェックアウト
デュアルカバレージ、プライマリーテイク　トランジションでの判定　ターンオーバー後の判定
3Por2P（プロテクトシューターを含む）　EOQとEOG（クロック管理）　その他のケース（フリースロー、ジャンプボールなど）

④「処置ミスゼロを目指して」　～オフィシャルズとの連携と役割～
担当　北沢様・阿部様
Refereeの役割
①ルール　ガイドラインの理解　②メカニクス　③TO管理　・プレゲーム、ポストゲーム
①から③が処置ミスを防ぐ
処置ミスとは
クロック、ノーコール、ファールの数、FTの数、シューターピック、同時刻入退場
・防ぐことができる→ルールの理解ミス、メカニクスの崩れ、TO任せ
・防ぐことができない→機材トラブル、メンタル、ノイズ
処置ミスに繋げないための対処法
ルール、TO、クルーの3つを利用すればどんなトラブルも正しい判定を導き出すことができることができるはず！
Officialsの役割
正しい判定の積み重ね
プレーに集中させる環境
全力を尽くしゲームを無事に終わらせる

実技

担当試合	期　日	令和5年　7月25日（月）	男子　女子	1回戦
	対戦カード	県立富岡東（徳島）　VS	県立横浜立野（神奈川）	CC　U1　U2
	相手審判	CC　紀伊　孝哉　U1　箱石　拓也　U2　石黒　晋		

ミーティング内容　　主任

PGC　前日の研修会の内容と新ルール対応、表示物について、チーム情報を確認した。
メカニクス・プレーコーリング（プロテクトシューター、イリーガルスクリーン、シリンダー）

ゲームについて（クルー間で）
初出場の横浜立野と出場経験のある富岡東。両者ともに県立高校同士の対決になった。序盤は横浜立野が富岡東についていく展開になってが、時間の経過とともに点差は開き、富岡東の勝利となった。1試合通して、怪我人や処置ミスといったケースもなく、問題なく終われたと思う。個人的には1Qの入りのテンポセットが良かったと思っている。点差が離れる試合ではあったが、ゲーム終盤までイリーガルなコンタクトが続いていた。ゲーム序盤にオビアスなコンタクト・手の使い方に笛を入れておくことで、ゲーム終わりまでのクルーでの基準を保つ要因になったと思う。しかし、逆に言えば試合終盤までイリーガルなコンタクトが続いていることも事実としてある。ゲームフローやキーマンの把握をもっと丁寧にしつつ、ゲームのポイントとなるところでの判定にチャレンジし、ゲームコントロールすることもできたのでは？？と自身に問いて映像を確認した。
・ゲーム中に特に気になったケース
ブロックorチャージ・・・どちらのチームにもあった。（Lプライマリーの笛がなっていないセカンダリーで鳴るケース）
トラベリング・・・富岡東のベンチから、『県内では吹かれたことがない』との問い合わせがあった。
ゲーム終盤でのコンタクトに対する判定・・・いつ？どこで？誰が？何を？どう鳴らして？ゲームを進めいていくか？

講評（北海道S級田中様）
・個人として、判定に対して積極的だった。またプレゼンも良かった。自身で振り返られていたように、ゲームの進め方や終わらせ方にも気を遣っていけるともっと良かった。
・クルーとして、試合の最後までイリーガルなコンタクトに笛を入れていったのが良かった。点差が離れても最後まで諦めない高校生チームらしい戦い方をしていく中で、怪我がなく無事に終われたことが一番良い。
・トラベリングやブロックorチャージについては映像を見てきちんと確認してほしい。判定が合ってる、間違っているの話ではなく、ゲームを通して必要だったか？プライマリーは？メカニクスは？事実・責任・影響は？などを確認しながら見てもらいたい。そこから次のゲームに繋げてほしい。

実技

担当試合	期　日	令和5年　7月26日（火）	男子　女子	1回戦
	対戦カード	藤枝明誠（静岡）　VS	美来工科高校（沖縄）	CC　U1　U2
	相手審判	CC　岸本（岡山）　U1　前田（愛媛）　U2　箱石（埼玉）		

ミーティング内容　　主任

PGC　前日の研修会の内容と新ルール対応、表示物について、チーム情報を確認した。（特に外国籍の選手）
メカニクス・プレーコーリング（プロテクトシューター、イリーガルスクリーン、シリンダー）

ゲームについて（クルー間で）
美来工科高校と昨年ベスト4の藤枝明誠との対戦。両者ともにスキルが高い選手が揃っている印象だった。美来工科はサイズはないが激しいディフェンスとリバウンド、速いテンポでのショットセレクト（特に3ポイント）をベースにU18の代表選手や外国籍の選手にも臆せず戦いを挑んでいった。序盤から激しいリバウンド争いやディフェンスのプレッシャーがお互いにある中で、美来工科が藤枝明誠についていく展開になっていった。時間の経過とともに点差は開き、藤枝明誠の勝利となった。1試合通して、外国籍選手のICをどう保たせてあげるかが課題になった。また美来工科のスタッフには審判経験が豊富な方がいたこともあり、ベンチからの声にどこまで反応してコミュニケーションに繋げていくかが大きな課題であった。点差も離れたこともあり大きな問題なくは終われたと思う。しかし個人的には悔いが残る試合となった。

反省事項
GOOD
・1Qのトスアップ→OOB→タイマー動かず（1秒から2秒経過）→適切に処置できた。
・1Qセンターからのリバウンドコール（ケイデンス・ストロングセンター・オビアスコール・GC・ICなど）
Bad
・3Q EOQ→クォーター終了の合図はバックコート4.9秒以下であれば、Cプライマリー
・4Q残り2分切った後、メカニクスの崩れからのヘルプコール（プライマリー箱石　セカンダリー岸本）
・4Q EOQ　FT得点後12秒スタート→タイマー止まっていることに気づけず→Tレフェリーが訂正（メカニクスとIOTをもっときちんと！）→時間の訂正でゲーム中断→交代請求→交代は認められないところを交代認める（処置ミスケース）

全体を通して
点差が離れる試合ではあった。ゲームフローやキーマンの把握をしつつ、ゲームのポイントとなるところでの判定にチャレンジできたと思う。また、相手プライマリーを尊重し、シングルコールで進められるようエリアの確認は特に重要視した。その中で、自身のプライマリーを助けていただいたケースがいくつか出てきた。自分としては自信を持ってノーコールorコールを判定していたが、映像で見返すと、ポジションに入るのが遅れていることに気づいた。ポジションアジャストをもっと早くできていればコールに繋げられたかもしれない。また、自身のプライマリーを強く意識することで、メカニクスの修正やタイマー管理に気付けた可能性がある。さらにCCメンタリティーを発揮して明らかに違うことに気づけた際は「勇気と決断」を合言葉に判定していきたいと強く感じた。まだまだ自身の心の揺らぎや弱さが目立つことが多い。どんな舞台でも審判員として当たり前のことを当たり前にできるように研鑽を積んでいきたい。

全体の感想

まずはじめに、北海道バスケットボール協会及び北海道高体連バスケットボール専門部の皆様には細部にわたるまで御配慮頂き大変お世話になりました。また、今大会へ派遣して下さった埼玉県協会、日頃活動を共にしている県内審判員の皆様へ、この場をお借りして御礼申し上げます。
担当した2試合で感じたことは、新ルール適用について、それぞれのプライマリーを尊重すること、EOQ・EOGクルーワーク、メカニクスの重要性、コミュニケーションの大切さを肌で感じることができた。また、大きな舞台だとしても臆することなく、判定をし、決断をする精神的な強さを学ぶことができた。メカニクス、判定、プレゼンといった課題は多く、反省は尽きることはない。しかし、この経験をいかして各所で行われるブロック大会の3回戦以上・セミファイナル・ファイナルへの割り当てを勝ち取りたいと強く感じた。特にメカニクスについては、EOQ・EOGでの大事な時間帯でのベーシック・メカニクスの重要性を学んだ。誰がクロック？誰がショット？誰がSC？ファールがブザーよりも先？などのたくさんの情報を3人で共有し、協力できるかがキーになってくる。ゲームが拮抗すればするほどゲームの終わらせ方がいかに重要なことかを改めて感じた。
久しぶりの研修会も実施され、今回のルール改正の目的や映像を使用してグループディスカッションを通して、全国の審判員の方々と意見を交換することができた。オンザコートでは、臆することなく普段通りにできたと思う。派遣されるたびに感じることは、一人ひとりの審判員には必ず価値感や考え方があり、これらを一つにまとめて、選手やコーチ、そして観戦している人たちに還元することが大切であり、大変難しい作業だと痛感した。また、多くの審判員の方々の大切にしていることを吸収できたことは非常に大きな収穫だった。今回インターハイで2回目の派遣になるが、県内では経験できないことがたくさんあり大変有意義な時間であった。また、全国の舞台に出ていくためには埼玉県の代表としての自覚と責任が必要であることを改めて感じた。

埼玉県の審判員の皆様におかれましては、今回のインターハイで経験さていただいたことを共有したいと思っております。そして、皆さんで切磋琢磨し、県内だけの活動に満足するのではなく、県外や各ブロック大会の派遣を勝ち取るために共に努力し、強く逞しいチーム埼玉にしていきたいと強く思っています。夏のミニ国体、来年の新人関東を無事に終了できるよう一緒に頑張りましょう。今後もご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。